

司書半生

相馬文子



生半書司

子文馬相



A.

著者略歴

大正10年，新潟県生れ。日本女子大学国文学科卒業。東京大学史料編纂所勤務を経て昭和20年11月日本女子大学勤務，附属図書館主任を勤む。昭和57年退職。日本近代文学館図書資料委員会幹事。日本近代文学館評議員。編著「相馬御風・人と文学」（名著刊行会）「定本相馬御風歌集」（千人社）主著「相馬御風とその妻」（青蛙房）
現住所〒223 横浜市港北区新吉田町 1526—86

司書半生

定価一五〇〇円

昭和六十三年七月二十五日発行

著者 相馬文子

発行者 吉川志都子

発行所 三月書房

〒101 東京都千代田区神田錦町三一六

電話 〇三一二九一—三〇九一

振替 東京一—五三二二五

印刷 壮光舎印刷株式会社

製本 松栄堂製本所

© Ayako Sōma 1988 Printed in Japan

ISBN4-7826-0117-4

司書半生
目次

I 司書半生

思い出の史料編纂所

史料編纂所で聞いた旧師のこと

終戦・雑誌「ロゴス」のこと

父との別れ―遺された資料のことなど

一つの図書館のあゆみ

蔵書の運命―一事例として

司書半生

利用者の顔―その後の覚書

図書館員と読書

新刊と古書

図書館での選書

スペース戦争

9

26

31

52

60

74

78

82

86

89

92

95

II 資料渉猟―藤田鳴鶴こぼれ話

藤田茂吉プロフィール

「仏国某州領主・麻吉侯情話」

鳴鶴の観劇所感

「東京経済雑誌」の「文明東漸史」評

学業勤怠表と三田演説会

「帰家」の詩について

森田思軒宛・藤田茂吉書簡

大隈重信宛・藤田茂吉書簡

鳴鶴と夜会

第一回帝国議会の藤田茂吉

伝記についての雑感

あとがき

司書半生

カバ
ー

カット

福井三知

相馬皓

I
司書半生



思い出の史料編纂所

私が日本女子大を卒業したのは、昭和十六年（一九四一）の三月であったが、この年の十月、文部省は当時の大学、専門学校の修業年限を短縮しているので、私より一回、下の人たちは同じ年の十二月に卒業となり、以来、昭和二十年の第二次大戦終結迄は毎年の九月に卒業という事態が続いている。

そして昭和二十三年には新制大学が発足する過程を迎えることになる。私は、正に戦時下の短縮直前の春に卒業し、前年昭和十五年秋には又、学生生活最後の関西方面研修旅行も出来たのである。

と言うのは、昭和十五年六月に文部省が修学旅行制限の通達を行っているので、いわばぎりぎりの挙行であった。

しかし、そのような卒業期にあつての当の私自身は何と腑甲斐の無い学生であつたのであろう。正直言つて確とした将来への計画も希望も皆無といつてよかった。

緊迫しつつある世界状況、日本国内の様々な動き等も、その頃の私の判断力の及ぶ所ではなかった。

そしてまだ、最後の学生生活にそれほど暗いイメージは無かったのである。

けれども、当時忘れ得ぬ事件が私の身近にも起っていた。

さかのぼって昭和十四年夏にはすぐ上の次兄が応召、越後高田の歩兵第三十連隊に入隊していた。そして昭和十五年、一月二十一日、日本郵船株式会社客船「浅間丸」臨検事件というのが起っていたのである。

浅間丸というのは昭和の始め（昭和二年）に建造され、かつて太平洋の女王とさえ称せられた一万六千トンの客船で、第五次太平洋横断の復路、サンフランシスコから横浜へ帰航中、千葉県野島崎灯台三十五海里の沖合で、突然英国軍艦から停船命令を受け、サンフランシスコから浅間丸に乗り込んでいたドイツ人船長他五十一名の中、二十一名が連行されたのである。

日本は中立とはいえ、当時英国と戦闘状態にあったドイツ人帰国に日本船が手を貸すという事は英
国を刺戟しかねない状態ではあった。

翌、一月二十二日の新聞各紙は大々的にこの事件を取り上げ、反英米的であった当時の国民感情を煽り、更に右翼団体の示威運動ともなり、外務省、海軍省、首相官邸をはじめ、イギリス大使館、日本郵船などへ押しかけたりした。

とにかく事件は政治、外交問題へと大きく発展して行き、当の浅間丸船長、渡部喜貞は結果として政治葛藤の生けにえとして下船を余儀なくされ、東京待命の身となった。

事件のあらまは以上のようなのだが、何故唐突にこの事件を持出したかというと、この事件直後、浅間丸の新船長として就任したのが、私の亡母相馬照子実兄、藤田徹であったのだ。

昭和十五年、二月七日の東京朝日新聞には、浅間丸全容の写真と共に、「新船長の総指揮で浅間丸明るい旅へ」の大見出しで藤田徹船長の顔写真が掲載されている。

記事の中には、

「この朝船長室に藤田船長を訪問すると静かな微笑と共に『今回命令で乗船、香港まで行き、再び帰港してホノルル経由、アメリカへ向います。船もドックへ入ってお化粧を済ましていますし、私も白紙で明るい心持で乗込みます。日章旗の名誉に賭けて努力いたす覚悟です』と力強い言葉、(中略)新船長の腕前は棧橋すれすれに一万六千トンの巨体を軽々とすべり出させる見事な出港振りであった」とある。

私の祖父鳴鶴・藤田茂吉の二男である藤田徹の温顔はどこか茂吉を彷彿させ、又、内に秘める正義感も通じているように思われる。

私の母は既にこの世に無かったが、父母結婚後、東京在住の明治四十三年、藤田徹が商船学校練習船大成丸の第六次遠洋航海実習に出航するのを夫婦で横浜に見送ったりもし、又、徹は父茂吉ゆずりであったか文章も能くし、父御風はこの航海記を「早稲田文学」や「中学世界」に紹介、掲載された。この浅間丸新船長就任の折も、従って御風は大いに心を寄せ、義兄の航路をひたすら祈るような気

持であった。

御風の義兄に贈った次のような歌も残っている。

おとづれは絶えて久しきわが義兄

藤田徹を思はぬ日なし

大きな使命になへる身とおもひ

たよりはせねど祈らぬ日なし

しかも、奇しくもこの浅間丸事件の前、昭和十五年一月藤田徹は当時箱根丸船長で東京待命中であり、久々で越後糸魚川いとがわの御風の許をおとずれている。折りしも越後は雪深く、郊外の墓地へも行き、妹照子の墓参までしている。そしてそれが御風とも泉下の妹とも最後の別れとなっているのである。

このような私の伯父藤田徹をめぐる諸相は父のたよりによってもたらされたが、国内においてもこのような時局の推移を人知れず父が憂えていた事は言うまでもない。

そんな周辺の動きの中で、私も卒業後の方向づけを決せねばならなかった。

後日、それも極く最近、昭和十六年五月二十九日の日付で、父御風から大磯の日本画家安田靉彦画伯宛の書簡の文中に、

「(前文略)なほ女兒文子今春おかげ様にて女子大國文科を卒業させていただき、直に勉強かたがた東京帝大の史料編纂所につとめさせていただき居申候」

の箇所が私の目に止り、卒業後東京に留る事を父に懇願した事を私は思い出していた。

勉強したとも言えぬ中途半端な四年間であつた事を自ら顧り見て、私は最も父の財政的に苦しかった時に遊学させて貰つた呵責感もあり、その他、色々な事由からも郷里の家に帰つてしまふ事は極力避けたかった。永い独り居の父は私をそばに置いて多少共仕事の手助けをしてほしかったらしいが。

しかし当時は戦場におもむく男子が多くあつて、在学中にいわれる「お見合い」を済ませている友人も少なくなく、一方、専門学校など出たからと言って、女性が直ちに職場に就ける時では無く、職業婦人などもつてのほか、嫁の貰い手がなくなるという世の大方の理解であつた。

事実、卒業と同時に職業に就いたのはクラス四十四名中、十人足らずであつた。直ぐに結婚生活に入らない人は当然、花嫁修業に明け暮れるのが普通とされた時代である。

現今のように学内に就職相談係のような部署もなかったので勢い、各自で知恵を絞るより他なく、私は同級の、日頃それほど親しい間柄では無かつたが、たまたま就職を得たいという事で一致したKさんとNさんの三人で方法を講じ始めた。

どうやら三人とも教壇に立つという事より、研究機関のような所という結論に達して、講義を受けている先生の誰方かに勇を奮つて依頼して見ようという事になった。

そして、当時国文科の歴史学の講義を担当しておられた西岡虎之助先生か中村孝也先生のいずれかに御相談して見ようという所まで話を進めた。

もとより国文科の歴史であるから、いわゆる通史で、西岡先生は平安から中世まで、中村先生は近世史を講じていた。

講義は語り口の面白い、ユーモラスな面もある中村先生の方が女子学生には人気があったが、一見無愛想で朴訥な西岡先生の講義が何故か心に残るものがあって、K、Nとの意見もまとまり、三人打揃って西岡虎之助先生の所に罷り出たのであった。

先生は一瞬、驚かれた様子であったが、その後は実に誠実に事を運んで下さった。

書類は勿論提出した訳であるが、簡単な面接のみで三人とも採用が決り、あまりにもスムーズに事が運び、喜びと同時にびっくりもした。今から考えて見ると三人の中少くとも私は最優秀の成績でも無かった筈であるのに、やはり戦時下であった事を考えざるを得ない。

又、入所後、中村孝也先生が東大前のレストラン「鉢の木」へ私ども三人を呼んで下さり、「何故、自分に相談しなかったのだ」と言われ、三人とも恐縮してしまった思い出もある。

かくして東京帝国大学史料編纂所雇員（私立出であったので）となり、月給金四拾五円の給与となつて本郷の赤門をくぐる日々となった。

入所して最初は「校正部」へ配属され、ここで仕事の何物なるかを教えられるのである。

史料編纂所の沿革は明治二年（一八六九）の史料編修国史校正局で、同二十八年（一八九五）帝国大学文科大学に史料編纂掛を設け、「大日本史料」「大日本古文書」の出版を開始している。